

# 環境教育としての動物園教育の歴史と課題

—ポスト COVID-19 の動物園環境教育—

河村 幸子  
(東京農工大学)

## 1. 問題設定

日本の動物園水族館（以下動物園）は、今新しい「教育の場」として見直されている。動物園は動物の生態説明だけの展示やレクリエーションの場だけではなく、その動物の種の域外・域内両保存のために生息環境の変化や人（自分）とのつながりに気づかせ、来園者に生物保全、環境保全のためのライフスタイルの変化を促すプログラムが必要とされている。動物園における「環境教育」が必要とされているのである。

動物園における教育については、社会教育としての意義や役割（菊田 2008）、学校教育と連携したものの（松本 2015）等、動物園関係者、研究者、動物愛好家等により、多くの研究がなされており、日々その成果が問われているが、動物園観として「動物園は癒しの場」という意識が強く、ショー等のイベントが多く実施され、アニマル・ウエルフェアの面からも動物を愛護することも重要視されるなど、命を伝える動物園教育の方向と施策が求められている。本研究は、日本の動物園の環境教育の歴史を区分し、ポストコロナの動物園環境教育について課題を明らかにすることを目的とする。

## 2. 研究方法

COVID-19 の影響で現地に移動することができないため、インターネットを使って日本中の動物園と水族館について調査した。ホームページだけでは環境教育の内容が不明な園については、電話調査を実施し、動物園 374 園、水族館 118 館の環境教育実施状況を確認した。

## 3. 結果

日本の動物園で行われる教育を環境教育としてその歴史をみると 4 つの時期に区切ることができる。①見せ物としての動物園②猛獣処分の時代③娯楽施設としての動物園④野生動物保全のための動物園である。また、2020 年 2 月から 4 月、日本中の動物園が COVID-19 の影響で休園した。6 月に再開園はしたが、人の集まるイベントや解説は全て中止になった。それでも多くの動物園がインターネットを使って、Twitter、Facebook、Instagram、YouTube などを利用し、動物の生き生きとした姿を発信し始めた。このことは動物園教育の新しいスタイルを生み出すきっかけとなった。日本における動物園・水族館の教育を日動水に加盟・非加盟に関わりなく、全て 492 施設を調査した結果から、今後の動物園環境教育の課題について述べる。

人数を制限した観察ツアー、予約制による充実したプログラムなど、生きていく動物の生命の素晴らしさを知り、生息域の環境と人とのつながりに気づき、地球上に共に生きるヒトも動物のなかまであることを学び、自分はどうか生きるのか、ライフスタイルまでも見直すことのできる、ハイクオリティな動物園環境教育を構築することが求められているのである。